



倪  
新  
送  
系  
浪  
發  
句  
系  
二  
編  
札

~ 5
5612
1



門 5  
號 5612  
卷 1

行發冬卯辛

平日虎牙津函

此  
新選系以發句集二編二札  
母坤

東京香月社花標



道  
道  
道

道  
道  
道

道  
道  
道

道  
道  
道

道  
道  
道

道  
道  
道

道  
道  
道



言也心何事はよなき  
はげもは集るぬ  
しつきの集つる集るよせむら  
綾〜あわじと世の二つ  
多浪のいふもは浪のまねる  
美〜あまのつとよ  
〜あまのつとよ

新編一目巻の序詞

よとよとよとよとよとよと

あまのつとよ

あまのつとよ

新編一目巻の序詞

あまのつとよ

新編一目巻の序詞

一 終るにまじりて  
去るに  
去るに

去るに

去るに



例言

○ 本集編纂の意は去年の冬、案外せし  
初篇は緒言を述べたるに、是より所なるれ、後  
省きたる記す寸前の冊子と合せたる所の宛方  
冊子蓋を、如くなるべし

○ 卷中、如海句、初篇の是と、より更に別なる紙  
撰む他者、ハ舊より、廿冊子、別原を、主福  
人との外、如く、ハ、交り、を、結ひ、種賢の奈  
向方、好、多、如、く、なるべし

○ 世編より、去年の秋、是より、下の卷、不、着、手、な  
佳、筆、園、主、如、宛、を、入、り、ハ、是、の、前、ら、さ、り、き、著、載

篇の初より一考其息の寄るなり一平如今年  
の神より上は巻紙編むふあつて一具書きたる  
老て益健氣をれいと尋香上人の宛より入る  
るやとふなりし書

○社名との先約不偽り毎是撰者の海句を加入  
せらるる例とせり猶ふ板下は陰陽了○押  
さく福安ならぬとつゝも書きたる一詞を  
既漏せり甲某其粗忽と詰る乙曰撰者の句  
能く精神の入りとて考一躍して遊まじり  
ならんと兩丁皆あし

○先例ふ偽いて近江清庵せし一紙他の中より  
し四巻とて括て梓の上する石研ありと書る

あつて磨らるるもむと連ねたるもの妙く元より瑕瑾  
なりとせり其取捨の覚者の賜に任す

○し冊子の元毎月兼是とて集めたる巻句  
の内より撰りしものたるも其大名家の細り  
油をも加けて月々に梓よのせ急連りし  
紙ももとせりしとせしもの撰校の粗漏  
書字の誤り或は仮名違ひふ力ありし今完結  
せりしと書し行心はあつたれども書し油たるも  
あつたるもく宜しく補ひ給ふ

明治廿四年のこし一初

風月如練  
性下誌

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

あつ磨らざるもまゝと連ねたるもの妙く元より瑕瑾  
りしを其取捨の覚者の明に任せし

○し冊子の元毎月兼題を以て集めたる奈白  
の内より撰りしものたるも其家老の御  
油をも加へて月々に擇りし急連なり  
候もそのまゝに撰りしもの候  
書字が深し或は存名違ひ亦有ありし今完結  
するに際し行ふに及らぬものありし油たるも  
あるを以て之を以て補ひ給ふ

明治廿四年のこゝに

風月如練書體  
性下流

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

新選年浪發句集二編

上の卷  
半日庵芳律選  
菱荇庵文禮校  
一具庵尋香園

一日

見新物 <small>ト</small> 漏 <small>ル</small> 一日の光 <small>ト</small> うれ	三河	菴	宇
一日や 態 <small>を</small> わまれ	羽後	唯	風
一日と 好 <small>き</small> なる	本	風	
一日の 世 <small>の</small> いろ	柳	下	
一日や 年 <small>と</small> 秋	新	雨	
一日や 夢 <small>を</small> うら	十勝	松	

一日ハ膝のうしろに日ありは季 本 京 箭 浦  
 一日ハ午時過ぎるも侍 杉 ありは  
 一日も物に 頓着せぬは 寸 芳  
 一日ハ木の音のほろろ言ふは 武 菰 原 蒼  
 一日ハ戸毎に あまも 笑ひは 武 菰 山  
 一日の帝もまじや 籍の回も 言 音 林 山  
 一日ハ笑ひ言ひ 丁仕舞は 楽 友 林  
 一日を舞も 踊るは 上 毛 多 我 友 林  
 一日ハ袴も 踊るは 信 濃 晴 月 我 友 林  
 一日ハ 踊るは 人 信 濃 言 葉 貫 山 月 我 友 林  
 一日ハ 席に ありは 越 後 貫 山 月 我 友 林  
 一日ハ 着せられたるは 小 百姓 磐 城 竹 海 山 月 我 友 林

一日ハ 五歩の如き世の 好 言  
 一日ハ 年の奇も 杉 ありは  
 一日ハ 隙も 少く 松 ありは  
 一日ハ 舞も 踊るは 豊 前 芝 山 月 我 友 林  
 一日ハ 百毛 色は 豊 後 芳 律 園 山 月 我 友 林

初稿

一日ハ きのこ 鳴きしは 本 京 丹 蒼  
 一日ハ 園を 掘り 耕すは 本 京 丹 蒼  
 一日ハ 去年の 煙も 本 京 丹 蒼  
 一日ハ 戸の 音も 本 京 丹 蒼  
 一日ハ 世界 ありは 本 京 丹 蒼  
 一日ハ 鳥 ありは 本 京 丹 蒼



時をくも 人もあまふし とき移上毛糖  
啼くももから信るれ 神鳥 貫山  
きくも 年 題くまく 神うらす 越後 有  
初移 東山うら ときくも 羽前 室  
小里よ ありき ときくも 羽前 五  
常より ときくま ときくも 羽前 聽  
初馬 時をくも ときくも 羽前 泉  
余の ときくま ときくも 羽前 梧  
ときくも ときくま ときくも 羽前 獨  
音の 打ハ 丁子 ときくも 羽前 里  
の ときくも ときくも 羽前 山  
おの ときくも ときくも 羽前 園

羽音も 信は ときくも 初移 羽前 糖  
鳥くも ときくも ときくも 羽前 呉  
ときくも ときくも ときくも 羽前 鳥  
初移 ときくも ときくも 羽前 似  
初馬 ときくも ときくも 羽前 年  
初馬 ときくも ときくも 羽前 文  
活をの ときくも ときくも 羽前 芳  
時人子 ときくも ときくも 羽前 文  
鳥 ときくも ときくも 羽前 禮  
鳥 ときくも ときくも 羽前 禮

門松

門松を 鳥の 大きき 鳥 大坂 嘗  
着く 鳥の 大きき 鳥 大坂 嘗  
門松を 鳥の 大きき 鳥 大坂 嘗  
鳥の 大きき 鳥 大坂 嘗

欽定ものりいふいふ好松飾 上法九十年  
 門松毛動子立りり隣因士 忠代  
 門松毛根付しやう深いり 羽後  
 門松毛海名をのり通り町 羽後  
 門松毛 言を根付し 下地のもり 一  
 門松毛 浪風をよきせし家 柳  
 門松毛 外小本付し 新種き 柳  
 門松毛 立られいよき松のり 柳  
 門松毛 けりや言をいふ風情 獨  
 隠れ家の隠り多きせく松をり 言格  
 門松毛 けり言をいふ 羽後  
 立られいよき 羽後 松のり 羽後 文 羽後 旗 旗 山 山 泉 泉 山 山 水 水 常 常 卜 卜 下 下 香 香 孝 孝 山 山 史 史 陵 陵

門松毛 ちりりりりり 信隆 旭 盛  
 門松毛 伸毛 上 杉 長  
 子代 士 常 如 門 風  
 門松毛 常 相 遠 模 向 其  
 門松毛 浮世 東 小 京 葉 東 垣 京  
 子代 松 八子代 松 浮世 琴 好 琴 新 琴 種 琴 浮 琴  
 門松毛 銭 其 文 其 文 其 文 其  
 門松毛 飾 才 糸 才 糸 才 糸 才  
 門松毛 根 文 文 文 文 文 文 文  
 門松毛 船 芳 文 芳 文 芳 文 芳

蓬萊



海山如香も盛上るるさう少う子  
上毛 我  
 おのころの夜もあらはるる雜草の  
陸中 花雨廿  
 下もくまていたく神の雜草の  
羽後 芳川  
 旅もある人さうさうさうさうさ  
豊前 藤泉  
 雜草の鴨の別々の物もひく  
武伊奈 美文山  
 心も好もあこれ人のまじり雜草の  
出代 文花  
 酒も好もあこれの雜草のさうさ  
 又美ん時の叫びも雜草の好  
 蓋とれいらく好雜草の花  
 雜  
 文 芳 花 文 美 藤 芳 川  
 禮 拜 官 花 山 泉 川

左 著

左 著 巾 類 考 一 の 持 ち づ ち  
豊前 未 曉  
 左 著 巾 只 の 著 者 持 ち づ ち 見 小  
安藝 遊 園

左 著 巾 勇 一 の 子 老 一 ち づ ち  
上毛 玉 桂 年  
 左 著 巾 笑 顔 持 ち づ ち 嫁 姑  
 左 著 巾 何 れ 日 立 ち 也 益 の 照  
羽後 花 枝  
 左 著 巾 懐 の 子 水 持 ち づ ち  
 左 著 巾 老 一 ち づ ち 好 一 ち づ ち  
武伊奈 美 柳  
 左 著 巾 多 一 子 供 毛 皆 之 痛  
出代 江 春  
 左 著 巾 著 者 也 一 也 好 一 也  
 年 五  
 年 五 巾 從 弟 一 也 一 也 多 一 也  
 年 五 巾 一 也 一 也 一 也 一 也  
 年 五 巾 一 也 一 也 一 也 一 也  
 年 五 巾 一 也 一 也 一 也 一 也  
 年 五 巾 一 也 一 也 一 也 一 也  
 年 五 巾 一 也 一 也 一 也 一 也  
 月 秀 唯 芳 江 美 永 梅 花 玉 歲  
 靜 川 風 拜 春 柳 嘯 枝 桂 年

年玉や紅丹の里うら 烟のり 羽後 岸  
 やし玉や 尾の言葉集の巻一記 、 風好  
 年玉や 扇の 箔の ちる 札 、 清栢  
 子と巻く 解く 年玉の 白く 信濃 野雲  
 年玉の 昇つて 舟の ぎり 相模 如 風  
 とし玉や 扇の ぎり 上法 吾 柳 月  
 やし玉や 指の ぎり 修祿 暮 外  
 年玉や 封切の ぎり 豊前 呉 宮  
 とし玉や ぎり 上毛 楮 柵  
 年玉や 律義の ぎり 上毛 野 露  
 年玉や 手短の ぎり 上毛 物 我

山田

舟管も年玉の 心 呉 羊  
 年玉の 水川 派の ぎり 呉 拈 草  
 とし玉の 敷の 得意の ぎり 信濃 野 露  
 年玉の 白く 信濃 山  
 やし玉や おの 信濃 松  
 年玉の 楳 信濃 文 禮  
 とし玉の 結糸 信濃 芳 律  
 帳緘 信濃  
 帳緘 信濃 二 細  
 帳緘 信濃 晚 翠  
 帳緘 信濃 祥 松  
 帳 信濃 素 白  
 帳 信濃 白

帳緘

山田

帷緞や身傳ひ人も傳信簪代  
帳書や身さかき筆あさり  
帳緞や身さかき筆あさり  
身さかき筆あさり  
帳緞や裁ち屑膝を便さのゆ  
膝上げてぬくと帳のやまきり

其身

唯 蘭 貫 其 芳 金 律  
風 雨 山 山 英 律

### 若菜

さかすかさかすか  
儀うらむる若菜の  
言の質も花ひし  
新玉あたりやさる若菜持  
根さかすかかかすか

尾張

磐楸

上瑞

信濃

禰 栳 守 逸 種  
鞆 壺 友 水 宅

羽後

着少れぬ腰の曲らぬ若菜つ  
新玉あたりやさる若菜持  
新玉あたりやさる若菜持  
賞あつてもつひは若菜は  
免えらぬ若菜の若菜は  
降る若菜の若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は  
若菜は若菜は若菜は若菜は

葉 音 拈 物 白 松 濤 一 聽 素 月  
友 林 華 我 人 琴 雨 香 泉 白 泉 泉 野

揚子江の舟を降りて、若葉の  
花の餅の味を食ふと、さうな  
味の揚子江の舟を降りて、さ  
平生の舟を降りて、さうな  
舟の舟を降りて、さうな  
舟の舟を降りて、さうな

豊前

唯 黙 未 眠 芳 士 律  
風 史 曉 音 行 律

蕪入

蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな

上毛

上野

儿 庫 悟 如 五  
堂 文 信 風 生

蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな  
蕪入の舟を降りて、さうな

東京

河内

外 園 院 山 翠 月 友 友 癖 癖 池 梧 淇  
山 園 院 山 翠 月 友 友 癖 癖 池 梧 淇

上野

霧のや葉ふりつゝの好道心  
霧のや葉ふりつゝの好道心  
霧のや葉ふりつゝの好道心  
霧のや葉ふりつゝの好道心

几中

紙書... 婦... 骨... 親... 糸... 年... 落... 踏...  
紙書... 婦... 骨... 親... 糸... 年... 落... 踏...  
紙書... 婦... 骨... 親... 糸... 年... 落... 踏...  
紙書... 婦... 骨... 親... 糸... 年... 落... 踏...

武伊奈

晴 池 金 文 如 貫 文 芳 穂 風  
晴 池 金 文 如 貫 文 芳 穂 風  
晴 池 金 文 如 貫 文 芳 穂 風  
晴 池 金 文 如 貫 文 芳 穂 風

山風

か... 下... 夕... 古... 澄... 揚... 大... 切... 若... 里... 能... 柳...

羽後

唯 弄 梅 唐 聽 四 鞞 苔 未 點 二 可  
唯 弄 梅 唐 聽 四 鞞 苔 未 點 二 可  
唯 弄 梅 唐 聽 四 鞞 苔 未 點 二 可  
唯 弄 梅 唐 聽 四 鞞 苔 未 點 二 可

山風



人美の杉子昔もやわらびに中  
又見世知恵を借りてうけり  
高川のよきまね御書のみそこれ

東風

少地より新戸明れハ海も東風  
東風吹く松籟もあそむ水も泡  
舟をゆきまき吹く一東風是  
夕東風吹く吹かれて磯の酒の餅  
東風吹く流るるやうな都多  
東風吹く野のまきく日人通  
東風吹く獨り漏りゆき梅の水  
東風吹くゆれんよ一信一舟

漸  
芳  
律

上  
也

卓  
庫  
士  
文  
花  
月  
堂  
行  
月  
華

我  
侍  
素

東風吹く先活動ナ 不長なり  
東風吹く向きりたる 畑の層  
東風吹くあそむるまきの庭も  
東風吹くあそむるまきの相も  
東風吹く一固まる日和ら  
東風吹く一赤い裸木の桐林  
知東風吹く吹りたる 旅衣  
朝東風吹く港の船中 灯も  
東風吹く身を浮ゆき池の鷗も  
日知るナ 思ふ東風吹く吹り  
東風吹く今知る 小舟も  
高きナ 西の東風吹く 小舟も

於  
本

里  
風  
益  
梧  
黙  
全  
似  
涼  
白  
唯  
文  
山  
泉  
白  
栖  
史  
山  
月  
山  
人  
風  
禮

東風吹草深茅の舎り 滝流山

### 春雨

東京

晴まのつらや さらのよや 春の雨  
 かまひもみち敷のよきや 春の雨  
 春雨の降るや 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨  
 春の雨のあから 春の雨

芳 律

未 几 暮 如 古 舟 飛 柳 樹  
 院 堂 我 吟 風 松 暮 友 言 山

音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨  
 音もせん 降やせん 春の雨

黙 蘇 呉 宜 以 梧 杏 柳 鶯  
 史 山 寺 柳 柳 杏 梧 杏 柳 鶯

春雨や魚鱗とまじりて池  
子ももてぬ人の顔やまじり  
降るよの清く静かに春の雨  
春の雨温泉宿より別荘まで  
眠る春情はるまじりて雨

春言

とちやと旅人ならぬまの言  
庭名のわきまに花もまの言  
晴これハ月新まじりて春の雪  
降ゆ一ハ似ぬ晴もまの言  
袖のれハ言もまじりて春の言  
花のれハ言もまじりて春の言

黙 似 五 清 葉 唯 芳 歳 左 左 湛  
文 月 生 梧 雨 風 拜 年 園

春の言 醫原の能き年 借られ  
花の言 雨の言 止る言 春の言  
直る言 年の言 春の言 春の言  
春の言 止る言 春の言 春の言  
春の言 雨の言 春の言 春の言  
春の言 解る言 春の言 春の言  
春の言 春の言 春の言 春の言  
春の言 春の言 春の言 春の言  
春の言 春の言 春の言 春の言  
春の言 春の言 春の言 春の言

上毛  
出陣

春 文 其 寸 柳 桃 文 逸 物 近 桃 赤  
拜 禮 心 芳 言 山 洗 水 我 山 壺 曉



蘇山の帆のまゝとされし春の海  
明とすもなほ春の海  
荒るのありしとされし春の海  
浮風のまゝとされし春の海

蜺

指さすの 捲く川に 蜺  
ようなれし 捲く川に 蜺  
庵舟 捲く川に 蜺  
山子 捲く川に 蜺  
江の 捲く川に 蜺

相模

陸中

蘇山 洪山 柳寺 芳山 里山 本山 洪山 里山

親のありしとされし春の海  
船のありしとされし春の海  
心も傳ふとされし春の海  
船のありしとされし春の海

陽

陽のありしとされし春の海  
陽のありしとされし春の海  
陽のありしとされし春の海  
陽のありしとされし春の海

陸中

蓮史 美山 船外 白人 芳山 芳山 芳山 芳山

陽るや 庭を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心  
陽るや 庭を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心  
陽るや 庭を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心

以 左 一 梧 晚 芭 葛 五 菊 拈 庫 玉  
壽 香 風 翠 山 美 生 外 華 文 桂

陽るや 陸子 上り 池の森  
かきろく 名親をいかに 鶴の心  
陽るや 庭を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心  
陽るや 庭を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心

東京

一 葉 舟 丹 寸 文 芳  
瓢 每 蒼 芳 禮 肆

### 路の巻

日漏りの 光を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心  
陽るや 庭を忘れ 花を  
御幸の中や 雛鳴か 鶯の心  
さし給ふや 雀をいかに 鶴の心

羽後

松 尊 嘉 梧  
嘗 山 崎 栖

播ふる中の白くや 露の臺  
山の市 場をいふや 露の臺  
常のよけ ぬらぬら 露の臺  
世のつらさ ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺  
世のつらさ ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺  
世のつらさ ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺  
世のつらさ ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺

似 目  
黙 史  
苦 言  
世 言  
静 雨  
花 雨  
五 生  
多 我  
物 我  
其 山  
北 華  
清 抄

運をいふか ぬらぬら 露の臺  
秋田 ぬらぬら 露の臺  
節 ぬらぬら 露の臺  
子 ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺  
小 ぬらぬら 露の臺  
世のつらさ ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺  
世のつらさ ぬらぬら 露の臺  
指を ぬらぬら 露の臺

江 春  
芳 科  
文 禮  
森 峰  
四 林  
淇 山  
花 雨  
二 雨  
一 文  
号 山

娘幸のよきれぬ嫁布おき福  
まい〜と伸き幸味きき七幸  
袴〜と履きふさの〜  
祝〜と結き〜と〜ぬお幸〜

蒲公英

蒲公英や野風ふれ〜き船より  
多んゆ〜や繩の折た〜牛行馬  
蒲公英の繁の付り〜杖の先  
たんゆ〜や風を障らぬ笑き  
蒲公英の吹〜と〜と〜  
地車〜の響〜と〜と〜  
多んゆ〜や眠布の角〜

池 樂 友 岸  
文 禮 友  
著 禮 友  
信 園  
東 暁  
梧 樞  
黙 史  
梧 風  
常陸 不 鼻  
羽前 如 風

蒲公英や田如き〜  
たんゆ〜や道〜の〜  
多んゆ〜や川〜の〜  
蒲公英やた〜り〜  
たんゆ〜や煙〜と〜  
蒲公英やま〜の〜  
多んゆ〜やま〜の〜  
蒲公英やふ〜の〜

蕨

音の〜と折心〜  
折心蕨と〜の〜  
杖程〜と〜の〜

文 禮 友  
如 佛 節  
才 芳  
池 岸  
江 春  
芳 律  
文 禮  
學 山  
松 言  
志 白

正八



道へ出た歩みうたはる。しらひや  
 子鹿や箱根土着のうら合せ  
 赤のうら伸やうらなる藤のうら  
 早藤や汚くてもなる温泉も拭  
 子しらひやる借届きししら  
 山のうら海子書りししら藤  
 初藤無くおれははははら  
 湯治する百のうらなるや藤お  
 多如減もまておらさくしらひ  
 雨林焼畑連ま日ハ殊あり  
 動う初安くお焼畑の物うら

焼野

橋 里 山  
 其 山  
 文 禮  
 樂 友  
 拈 華  
 量 雅  
 法 龍  
 笠 舞  
 芳 緯  
 本 鳳  
 柳 下

焼く世より主候く降るや雲の雨  
 面より焼く物くく野中りあり  
 雨脚の屈く物くく焼畑のうら  
 雲のうら山を眺むく焼畑のうら  
 焼畑の野中り日く曇るく雲  
 林くや焼畑の末の石地を  
 言ひ出候るのうらなる焼畑のうら  
 野を焼くく道くくしら人富士の山  
 焼くく野焼の映る入江のうら  
 枯藤くくしらくくなる焼畑の  
 為白雲く河川焼畑の煙くうら  
 泊る人うらくくま焼野のうら

雨 山  
 泉 山  
 好 泉  
 老 雲  
 雲 外  
 芝 山  
 全 山  
 未 院  
 儿 堂  
 地 吟  
 庫 文

焼  
 野

第ハ水のわう流るゝ焼野を  
燃えやうしゝある林を焼野  
廣き野や焼くゝは焼くゝ地  
言はれりゝゝありゝ焼野哉  
瘦村のあり先黒き、焼野を  
焼く野小初と焼くゝは焼くゝ  
竹居の雨多流るゝゝ焼野を  
焼く目もたれぬゝゝ野面は

松の花

さかゝりもさわうゝからん松の花  
橋戸路ハ松の花さゝく曇るゝ  
朝鮮の便りあるゝ松の花

東京 羽前 常陸

二 松 菅 清 如 如 文 芳 唯 月 風 泉  
油 隆 溪 野 風 風 禮 律 風 静 泉

忘柄と知らず門やま川の花  
官身の物より新と松の花  
疎歩りゝゝ能き目くまゝ松花  
馬帽子着ゝ人の並や松の花  
真候下ゝ古の妻やあゝまゝ松花  
靴立ちやゝ心付るゝ松花  
新れゝ日知ゝゝ好松の花  
手拭傳拂ゝ麻和布ゝまゝ松花  
窓隙をよすゝ松花  
暖くゝゝものゝ松花  
江ハ室のみにゝゝ松花  
松の香ちるゝ知らん松花

東京

時 五 市 小 春 露 二 野 二 松 菅 清 如 如 文 芳 唯 月 風 泉  
明 生 吟 昇 任 外 史 調 年 南 柳 松

老の眉ひらく晴きり松の色

紅梅

紅梅や 遠くもわくふ里多ね色

紅梅の 師へ 持ちく 仕舞部屋

紅梅は 色もよもよ 酒の 磯

紅梅や 花の 師と 養ひ少風情

紅梅や 実もよもよもの ところ 何れに

紅梅や 浪の 眼もよもよ 梅を

紅梅よ 月と 花と 夢は 燈の 光

紅梅や 女あまの 後の 住居

紅梅や 眼醫の 門は 知れ 安記

紅梅よ ともくともよもよ 新陽の 春

芳 律

唯 白

意 卜

初 松

祥 竹

佛 吟

桃 壺

歲 年

湛 園

美 山

近 山

紅梅の色もよもよ 月と 花と 夢

紅梅や 師へ 持ちく 仕舞部屋

紅梅は 色もよもよ 酒の 磯

紅梅や 花の 師と 養ひ少風情

紅梅や 実もよもよもの ところ 何れに

紅梅や 浪の 眼もよもよ 梅を

紅梅よ 月と 花と 夢は 燈の 光

紅梅や 女あまの 後の 住居

紅梅や 眼醫の 門は 知れ 安記

紅梅よ ともくともよもよ 新陽の 春

初梅

物忌の 師へ 持ちく 仕舞部屋

紅梅は 色もよもよ 酒の 磯

紅梅や 花の 師と 養ひ少風情

紅梅や 実もよもよもの ところ 何れに

紅梅や 浪の 眼もよもよ 梅を

紅梅よ 月と 花と 夢は 燈の 光

素 幽

花 徧

笠 舟

舟 菴

安 甫

釣 篇

芳 律

唯 白

意 卜

初 松

祥 竹

佛 吟

桃 壺

歲 年

湛 園

美 山

近 山

老 眉

紅梅

素 幽 花 徧 笠 舟 舟 菴 安 甫 釣 篇 芳 律 唯 白 意 卜 初 松 祥 竹 佛 吟 桃 壺 歲 年 湛 園 美 山 近 山 老 眉

山の名もついでにや 柳をさくら  
 橋連りの見付也 柳 柳 柳  
 寺の賜もはねあつたや 柳をさくら  
 乞ふまゝに 柳をさくら 柳をさくら  
 豊内者下 酒代あつた 柳 柳  
 善所の柳も 忘れらるゝとてさくら  
 人の善も 忘れらるゝとてさくら 柳  
 日の柳も 忘れらるゝとてさくら 柳  
 重福着の 柳をさくら 柳をさくら  
 来りしれは 一日早 柳をさくら  
 幸の有御子 入日也 柳をさくら  
 物撰。子のあつた 柳をさくら

柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

端侍来りて道は是くは 柳をさくら  
 茶屋ハあり 普信平の 柳をさくら  
 人心動うさるれり 柳をさくら  
 約束の柳も 忘れらるゝとてさくら  
 柳をさくら 柳をさくら 柳をさくら  
 松の中 来りて 柳をさくら  
 深山路の 柳も 忘れらるゝとてさくら  
 ちりほらと 柳も 忘れらるゝとてさくら  
 善所好う 柳も 忘れらるゝとてさくら  
 善所好う 柳も 忘れらるゝとてさくら

百子香

柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳  
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳

柳

人の音も唐のうも空やもさうさう  
昔もく日も知らぬまへに百千鳥  
旅の音も唐の心知るくもさうさう  
能くくも唐の守の空や百千鳥  
也こそあれはまのあはれもさうさう  
鳴らぬやもさうさう向ももさうさう  
樹の芽も唐の空や百千鳥  
空もさうさう唐の海も百千鳥  
起るもさうさう唐の心知るくもさうさう  
美くも唐の心知るくもさうさう  
清くもさうさう唐の心知るくもさうさう

乙香

芳白花蓮几室如香扇梅俱  
舞人海堂鳳夢風常山

家もくも唐の心知るくもさうさう  
乙香の音も唐の心知るくもさうさう  
清くもさうさう唐の心知るくもさうさう  
実あるも唐の心知るくもさうさう  
待船の候も唐の心知るくもさうさう  
明くも唐の心知るくもさうさう  
清くも唐の心知るくもさうさう  
知るも唐の心知るくもさうさう  
昔も唐の心知るくもさうさう  
親の音も唐の心知るくもさうさう  
乙香の音も唐の心知るくもさうさう  
同へ唐の心知るくもさうさう

晚梧空若時若扇雨  
翠栖言明女雨好春梧峰風

多物をきれく小邦の蕙の香  
 蕙の香の能く立ちの如きゆ乙香  
 されはとてききるものなりん飛つる鳥  
 乙香は別原新あり小葉垣  
 法もくつらつらと指ゆる梅香の如  
 蕙の香のやら蘭香のこぼれお  
 乙香はとも通ひらんあつと船

稚子

鳴く稚子の牛の鹿のついでに  
 稚子啼や椿名物らんあまのきり  
 腸ももの如きおあや如稚子  
 走る稚子啼ききし新の野の夕

東京

香 物 香 柳 香 芳 芳 全 柳 香 物 香  
 香 物 香 柳 香 芳 芳 全 柳 香 物 香

稚子啼や桐油を垂るるの上  
 風流の春の鳥の啼ききす  
 稚子の多き蕙の香の如き山に  
 降るる鳥の空を切て稚子の香  
 稚子啼やる能く裸山  
 き一啼やまの如くは江の林  
 稚子啼やよるまの如くは松系  
 稚子啼や 陵寺の如くは山  
 き一啼や 時流まの如くは山  
 雨の如くは山  
 稚子の啼く山うらや虹の脚

東京

禪 玉 貫 空 桃 葛 晚 花 米 其 島  
 松 桂 山 海 山 美 翠 祿 舟 心 友

雉子ちくちたちちりつらう山は香  
辛味のもくハ香は書唱まへハ  
ゆきやれまふせらう一蜂のま

相模

蜂

巢のつれづれの蜂とておろす簾は  
知時や巢をばはれぬ蜂の親  
蜂の形や破れくはるる小柴垣  
まらの巢や火の中はのまの形  
冷すれハ蜂のまらう山 祠  
巢の向年ふらえはゆる蜂の  
まらうまらうの蜂のまらう  
一匹の蜂は日南をとられらう

二 似 吊 卓 香 逸 風 唯 文 芳 花  
油 月 山 川 我 水 好 凡 禮 律 月

巢の蜂や親の腹はぬき育ち  
蜂の巢小皆集るる益の鐘  
まらのすやえらまて道の積り  
蜂の巢やあらう一葉たるまの舞  
蜂の巢やまらうの香のつれづれ  
蜂の巢や知ら傳通れハ音もせら

蜂

蜂不足を補ふるも 蜂晴  
蜂入の息は日とくや 蜂前  
蜂のまらうの香も涼 蜂の極  
蜂のまらうの香もあらハ南の音  
いそ 蜂のまらうの香もあらハ南の音

信 後

逸 水 逸 清 唯 芳 文 池 拈 樂 長  
水 音 我 梧 風 蜂 禮 岸 華 友 羊

蜂

磨りしとて余り好ありて  
 細多小たりとのゆるき  
 行脚まほほせ人のきり  
 今年限りてとてきり  
 客のよも借るや替はあつ  
 可きとてとてとてとて  
 是外方とら好も替り年  
 玉の富とてとてとて  
 帯解てとてとてとて  
 山替は仰り強り也  
 香子素子の氣せり

若 鮎

宇陸

芳 白 拈 如 花 吳 默 湛 未 歲 種  
 律 人 華 風 月 言 史 園 曉 年 吟

鮎とむや高根の花子  
 若鮎の形傳ふ老氣  
 水多た色や細り小鮎  
 若鮎の如く細り小鮎  
 不濁る漸りてとてとて  
 沿ひあつとてとてとて  
 月夜傳ふとてとてとて  
 是れき星の光りや細り  
 昇る日如清漸り老る  
 若鮎の如く細り小鮎  
 若鮎や老る漸りてとて  
 鮎の子とてとてとてとて

東京

宇陸

文 芳 時 梧 空 湛 如 寸 东 台 子  
 禮 律 明 栖 園 園 風 芳 韜 齋 齋



雲の入る

雲の入るも 定る 旅の心  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面

吉江  
武考

庄中

十 湖  
牛 仙  
拈 華  
儿 堂  
士 行  
玉 桂  
如 鳳  
其 山  
一 梅  
蘭 雨

雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面  
雲の入るも 舟の面

吉江  
武考  
庄中

十 湖  
牛 仙  
一 梅  
如 鳳  
其 山  
一 梅  
蘭 雨

行春

行春

風

善の行うく人少の氣 磯の磯  
行書巾のくうら海をく旅路  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ

水 几 其 黙 芒 晚 柳 本 月 梧 法  
音 堂 鼻 山 史 山 翠 蓋 風 靜 風 梧

相模 常陸

北窓下 風通を 目や 善の行  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ

心 簾

丁子湯の 白ひさか 善の行  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ  
行書巾 京中分七のぬくもふ

香 靜 如 學 初 梧 唯 芳 文 鹿 素  
峰 雨 風 山 卜 風 風 緯 禮 友 柳

陸中 羽前

蘇 蘇

傳るもあはれも 色あはれも 上毛  
 内弁を隔てぬらや 青片  
 衣のあはれも 風の通ふや 簾  
 本音もあはれも せぬ空浦や 青片  
 雲深き 琴のあはれも や 簾  
 川の岸の空浦の 簾の 青片  
 著せし 空根の 月立の 青片  
 足出さす 空の 殊更 簾  
 掛し 日ハ 捲き 何れも 簾

更衣

柳 石 戎 文 水 山 史 柶 松 律 芳 吉 梧 黙 美 逸 庫 寺 柳  
 風 唯 泉 風 律 松 柶 史 山 水 文 戎 石

衣のあはれも 止場 衣  
 返るも 使 更 衣  
 舟も 朝風 衣  
 朝風 衣 衣  
 襟の 衣 更 衣  
 更 衣 衣  
 衣の 衣 衣  
 衣の 衣 衣  
 衣の 衣 衣  
 衣の 衣 衣

素 白 山 山 嶺 生 五 全 時 似 美 未 黙  
 史 院 山 月 的 生 音 嶺 山 山 白

龍  
 龍

更夜旅... 日之... 山里や市に... 更夜... 子育は... 朝風... 江の島...

東京 武蔵

竹 文 鹿 宅 蓮 物 子 儿 量 吳 全 淇  
 風 禮 孫 吉 史 我 我 夢 雅 宅 園

夜... 更夜

竹笋

笋や... 笋の... 笋や... 笋や... 笋や... 笋や... 笋や...

甘路

露の... 雨...

芳 其 素 吳 晴 吳 芳  
 祥 衣 我 幽 音 月 羊 梓

風 唯 好 風

地よりも 舞きぬ 露の 初りて  
音なり 降らぬ 新雨や 柳の 露  
露の 降る 面や さくら 咲く 露  
別てて 行く 旅人か 露の 露  
露の 香や 香ふ 上下も 行き 旅  
露の 柳の 雨ぬく 柳の 露  
一本 傳ふ 子 出 露の 秋 田 露  
きく 江 新 露の 目も 見え 露  
露の 白て せま ちり 露の 露  
あゝと ね 好 露の 露 露の 露  
湧水 いた 好 露の 露 露の 露  
切り きて した 露の 露 柳の 露

常陸 柳 貫 未 芝 歳 二 露 竹 好 扇 濤 柳  
風 山 曉 山 年 袖 外 吟 雲 風 雨 亭

露の 音 雨の 音 山 若葉  
降る 雨の 音 山 若葉  
露の 音 雨の 音 山 若葉  
降る 雨の 音 山 若葉

若葉

若葉の 音 雨の 音 山 若葉  
降る 雨の 音 山 若葉  
露の 音 雨の 音 山 若葉  
降る 雨の 音 山 若葉  
露の 音 雨の 音 山 若葉  
降る 雨の 音 山 若葉  
露の 音 雨の 音 山 若葉  
降る 雨の 音 山 若葉

高橋 里 以 五 花 法 文 芳  
山 孝 生 扇 臨 禮 律  
柳 梅 風 蘭 里 以 五 花 法 文 芳  
下 好 泉 雨 山 孝 生 扇 臨 禮 律

就壺の底の煙きくも若葉の春  
若葉の春の煙きくも宮の柳の  
温泉煙子如くも若葉の春  
流色は月を昇るや夕若葉  
降るも春の返りし若葉の春  
植替へも春の安堵く若葉の  
昇るも月を昇るや夕若葉  
ぬれ色は山のゆりも若葉の  
冷くも春の返りし若葉の春  
若葉の春の煙きくも若葉の春  
池の魚のゆりも若葉の春  
春の春の柳の旅のや若葉の春

常陸

全 祥 池 如 儿 真 柳 眠 全 呉 早 晚  
山 静 山 山 山 山 山 山 山 山

山壺の底の煙きくも若葉の春  
流色は月を昇るや夕若葉  
降るも春の返りし若葉の春  
植替へも春の安堵く若葉の  
昇るも月を昇るや夕若葉  
ぬれ色は山のゆりも若葉の  
冷くも春の返りし若葉の春  
若葉の春の煙きくも若葉の春  
池の魚のゆりも若葉の春  
春の春の柳の旅のや若葉の春

東京

全 祥 池 如 儿 真 柳 眠 全 呉 早 晚  
山 静 山 山 山 山 山 山 山 山

三五

卯の花や日和る色〜海も風れ  
卯の花や魚の糸の川〜重く  
卯の花の雲をよめれ〜白き  
卯の花や雲やまきい〜あまの風  
卯の花の煙や連行つ〜空  
卯のともや月影重き〜秋常  
卯の花の金風〜〜さき月  
卯の花や梅もさ〜くは月影  
ら〜もや月影さ〜ら秋〜意の  
卯の花やさ〜及〜ぬは鳥足  
卯の花やさ〜ら〜秋の隈  
卯の花やさ〜ら〜秋の隈

羽前

美 山 松 風 葛 枝 梧 近 孝 芝 花 眠 雲  
扇 淡 籠 薏 人 律 禮 風 峰 梧

卯の花や秋をよめれ早き〜水の音  
卯の花や 日知通て〜の 咲〜ふれ  
卯の花のよ〜ら〜山 踏〜ふれ  
卯の花や赤き御門〜 鐘〜垣  
卯の花の散るも 眠た〜ぬ 夢〜ふれ  
卯の花や 鐘〜くぬ〜 垣〜つれ  
卯の花やさ〜ら〜宿〜れ 夢〜ふれ  
卯の花やさ〜ら〜宿〜れ 夢〜ふれ

武伊奈

短夜

半〜短夜 卯〜小 家〜の 音  
舟の歌〜短夜〜と 知〜ひ〜ら〜り  
結 搦 舟 歌 の 時 安 一 松 子 月

美 山 松 風 葛 枝 梧 近 孝 芝 花 眠 雲  
扇 淡 籠 薏 人 律 禮 風 峰 梧

短歌やさうは雲中一と宿りらす  
くーの夜やさる泊りのきせり  
短歌やあそびのしれはあらむ意  
みーの歌や心のゆるむ短の五  
短夜やと燭の短のしりし  
くーの歌をよまむは長くなる哉  
短歌やされと森息く人よむき  
淀船の着くや短き短のひま子  
短歌とくくくまー好歌の月  
みーの夜の橋一旗うら旗かえ  
短歌や却よむる甚きもの陸  
くーの歌や香炉に残るうす睡り

一 香  
風 泉  
木 風  
如 風  
五 生  
葛 英  
近 山  
未 曉  
美 山  
點 史  
梧 栖  
歌 年

羽前

東京

播一ホハ伸て短くなる歌の  
短歌のあそびと歌員崔う南一  
くーの歌や送るも書信短の門  
短夜くくくく月の子き泊り  
甚瘦  
甚病のえん年よ送る換葉の  
るやせむ笑顔もえんや曇り雨  
甚瘦をよ月も善み戸口う南  
衣衣や好くもせし料理物  
ひらかせや自分ハさくも阿の福と  
甚瘦く外一て見せる様うな  
樂の身とまられて甚病子う

仙 芳  
仙 芳  
舟 舟  
律 律  
我 我  
甚 甚  
几 几  
吳 官  
二 神  
寄 外  
漱 圃  
美 山



其宿の神よき〜行儀  
 百せせき〜て宿や草の丈  
 其宿女結き、加擔人や婦の  
 宿や養生深き、人なれと  
 其宿もあふ〜さ〜く牛の  
 百せせハ美い時〜せ〜り  
 其宿や〜美縁ひの〜もの  
 其宿や〜紐舞〜て宿に  
 ち〜宿や〜余所の〜お宿は  
 百せせ〜せぬのお〜旅  
 其宿や〜年〜なれハ〜せ  
 宿〜我〜悲〜人〜

似 如 可 花 蘭 月 淇 里 祥 每 具 文  
 月 風 鼻 目 雨 静 山 山 松 友 尤 禮

草物

其宿の神よき〜て〜時計  
 藍の青も〜〜樹の  
 百せ〜六月の〜ひ〜の  
 宿〜源〜以〜草物  
 梅〜世の〜や〜物  
 物〜れ〜〜着〜人〜物  
 大〜の〜〜〜〜の  
 宿〜端〜〜川〜水  
 藍〜と〜〜〜草物  
 ひと〜物〜月〜梅〜先  
 着〜〜〜〜物

芳 玉 士 里 苧 素 松 凡 若 守  
 桂 行 音 風 卜 白 誓 好 甘 友

奇つう新柱の冷やひく人物  
廿底の早う着るものく卓物  
川風如吹裾うろくするもの  
腰うろく石の隈りや卓物  
赤毎さるも持てる足る卓物  
何常りん卓物着るく高く如て  
き好てる着る白のあつや卓物  
多物着て足立たり腰の綾  
けくちうらわゆる濡衣や卓物  
温泉巡りの揃ひの腰卓物  
ぬれて来たる只抱きんひく人物

虫

東  
原  
芳古桐委二黙晚浙其拈如  
律松岳外油史翠園山華風

上

船を無く新もものくれ夫世の初  
世の形ぬまのく傳はしきまき  
世うらひまうら世うら初月新  
世追くくまのあつて世家うま  
世まら初まの換くくまのりま  
世まら初まの換くくまのりま  
合書の世の腰せぬ新うま  
初く初世をく二人傳述りり  
世を初く世初世活を傳はれ初  
旅もく初世をくせく初  
篇帳を初初集初く初初  
さまうら初初初初初初初初

素黙芝金湛逸五木清松以唯  
幽史山園我生風雨風為風

上

鶴 鶴の力待てふも何と云々  
昔も昔もや言のあれたる  
るもあそくあそくもや  
入れききも根根の根や  
昔の心とくは紅母の心  
まきまきとくは紅母の心

蠅

人のあそくもや  
まのらも人  
近人のあそくもや  
天井のあそくもや  
蠅近くとくもや

光 堂  
几 堂  
池 堂  
一 堂  
文 堂  
嘉 堂  
扇 堂  
梅 堂  
梧 堂  
梧 堂

あつ人のあそくもや  
蠅近くとくもや  
照りもあそくもや  
蠅近くとくもや  
新市や新れ  
蠅近くとくもや  
近くとくもや  
附くとくもや  
あそくとくもや

子

素 幽  
吾 柳  
梅 元  
笑 南  
物 我  
味 必  
芳 必  
清 必  
源 必  
文 必  
芳 必

子子如海如水如霧如雲  
子子如松如竹如梅如蘭  
子子如蘭如竹如梅如松  
子子如竹如梅如松如蘭  
子子如松如竹如梅如蘭  
子子如竹如梅如松如蘭  
子子如松如竹如梅如蘭  
子子如竹如梅如松如蘭

唯  
紫  
好  
守  
未  
美  
扇  
逸  
芳  
米  
芳  
律

詩集

### 閑子香

閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香  
閑子香

素  
卓  
皓  
共  
未  
晚  
芝  
湛  
竹  
貫  
指  
古  
川  
月  
電  
院  
翠  
山  
園  
吟  
山  
華

詩集

とらふまゝとていふ廣きなり一岡子香  
嘉とあるをとり一香あり余子と  
し里ハ押田とていふやかんこ香  
廻て来る中をくぐる山中岡子鳥  
徘徊し居るも川あり余子香  
山廻して出る多却や岡子と  
よとすけいさく程断一ん香  
風の届かずのる中一余子鳥  
字にきく道のとらふ岡子香、  
ささゆき程力ややかんこ香  
まゝ宜きとてお山流中一余子香  
余の香も流れぬまや岡子と

唯 里 梧 蘭 風 五 時 一 一 哉 時 五 風 蘭 梧 里 唯  
風 風 泉 生 明 山 章 虎 芳 白 人

耳たててすぢとていふ岡子香  
すうとて病ふもとて余子と  
人銀待て啼とて断一岡子香

杜若

乙勝もハ高縁うらや杜若  
乙晴ハ活ての噴布燕子香  
鈴舞子揺り舞ひやあきとていふ  
池多たあうらまきとて杜若  
近よれハ且結道あり燕子香  
濤かき川子橋あり杜若  
如湖一とてゆれハ舞一とていふ  
杜若

桐 芳 文 唯 廟 里 時 蓮 湛 祥 芳  
岳 拜 禮 風 風 山 朋 史 園 松 我

七言

雨の日は快く 客中 杜若  
翠の葉は 花子 幸あり 燕子の  
連を 花の 心 かな かな  
身を 折て 使 橋の 音 杜若  
と あり 心 かな 燕子の  
降 日 雨 降 日 色 中 杜若  
晴 雨 結 借 咲 咲 燕子の

東京

花 袖  
花 袖 一 一 夢 花 袖 子  
紙 襦 一 一 夢 花 袖 子 垣 隣  
河 橋 と 砂 橋 の 音 花 袖 子  
先 振 る 暗 花 袖 白 白 白

長 全 全 遊 一 文 芳 芳 似 歲 号 芳 文 一 遊 全 全 長  
言 言 川 章 禮 緯 号 号 年 月 栞

孟 氏 の 水 も 白 花 袖 子  
借 物 花 席 子 袖 子 花 袖 子  
茶 子 席 一 水 花 袖 子 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子 花 袖 子

花 袖

花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子  
花 子 席 一 水 花 袖 子

東京

五 以 清 梅 柳 柳 芳 池 井 涼 秀  
生 存 梧 影 下 垂 緯 岸 仙 蕙 谷

枝をよもひつゝ  
音道何れもさ  
尾眠さく日如  
る隙もくみ  
上ま——  
それいとし  
飛の虫也月

東京

葉陽花や  
葉陽花のま  
葉陽花や  
葉陽花のま  
葉陽花のま

葉陽花

栂山 鉤翁 篠南 作風 美山 黙文 芳紳 如鳳 歳年 凌雨 芝山

葉陽花や  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま  
葉陽花のま

葉陽花

葉陽花のま

尾張

二油 儿童 文流 菅柳 菅里 一章 秀谷 寸芳 芳紳 文禮



憫なりハハらん青田の中は家  
 山廻せ使自の名何も青田の如  
 方高はとるるに昇るま田の如  
 山まよの儘て嬌しき青田の如  
 里よりや梅くちもあまの如  
 ままの如く梅て日影のたの如  
 村の如きふも田の如く  
 旅百里とて来て何の如青田の  
 眼のまもやうな青田の如く  
 笠の如解てまの如く青田の如  
 月と雲のかくれの如くま田の如  
 青田とて来て何の如く如の如

冷木  
 拾 笔 花 里 梅 素 木 凡 一 約 寸 尋  
 華 重 廟 山 躬 白 鳳 好 虎 扇 芳 香

江の輪を果し一とるま田の  
 水何より上る高も青田の如  
 都鹿の如く来賜はらま田の如

清水

篇引の密結て所は清水の如  
 金何よりまよの如く清清水  
 笑い如く一とるま田の如  
 日知る色目より何の如く清  
 吾の如く一とるま田の如  
 先の如く連結つ如の如  
 杜直て人の如く清清水哉  
 意の如く一とるま田の如

近 二 芳 嘆 梅 本 松 五 時 柳 宜  
 山 湖 律 風 常 鳳 嘗 生 明 盞 海



不自由の里とくしと清水の事  
船より世夢ひよ朱する清水は  
新に強く流る音のよくら  
お痛の人し又遠く清水の家  
宮守女米炊てみる清水の家  
之を免して又春を清水の家  
陸地をたぐうと如や昔清水  
響の清水りりの命と結ひたり  
海も水濁りありせぬ清水の家  
苔もたると清水を廣く命の事  
湧けりし風も吹流る清水の家  
深きれと底のよえましく清水は

貫山 儲文 庫文 几堂 如風 菀月 華扇 文洪 松韻 近江 淇園

旅の義理はよく教てとくれり  
湯色中々ととく清水の庵に  
新の音とくしとく清水の家  
清音とく流る音也 若く清水  
掬もたれ新新梅もとく清水  
清水より上ましくとく清水の家  
黄しき音の氣を清水の家  
之と掬ひてみる清水の家  
清音ハ玉も出さう清水の家  
帰り路を訓馬とく清水の家  
好む人女強れハ清水の家

吳電 梧栖 二油 未曉 似自 一章 白人 涼蕙 米舟 文禮 芳緯

雲の峯

香ふはるる河系遊ややうそ峰  
 聖川大い音をたけ 雲の峯  
 果のけし海を根の 雲の峯  
 于牽の油をさういさうのこ  
 釣執繩無うううの好やの峯  
 伝橋のさういさうの 雲の峯  
 重なれはまういさうの 雲の峯  
 泡のうけのよきさうの 雲の峯  
 川をまて着るさうの 雲の峯  
 その牽月の心さうの 雲の峯  
 杉を吹く風を絶えさうの 雲の峯  
 魚揚る船照 雲の峯

晴 電 蓮 好 空 五 柳 扇 淇 燕 月 啼  
 月 電 史 電 海 生 好 風 山 峰 霧 風

伝初のもちさういさうの 雲の峯  
 海系大い音をたけ 雲の峯  
 川舟の傳える日さうの 雲の峯  
 水香伝着る馬やさうの 雲の峯  
 傳へはあさういさうの 雲の峯  
 雲のさういさうの 雲の峯  
 宿の端をさういさうの 雲の峯  
 水子構むさういさうの 雲の峯  
 岩のさういさうの 雲の峯  
 悦傳川遊さういさうの 雲の峯  
 をくさういさうの 雲の峯  
 井岩をさういさうの 雲の峯

芳 飛 堂 可 淇 殿 委 吳 未 卓 玉 多  
 緯 友 溪 鼻 園 年 外 重 曉 川 桂 我

大方の物らぬ勝ありてやの海

川狩

川狩や月を白く照らすに  
川狩や魁らしきひし濁り  
川狩の草の氣をせきとるり  
川狩や人の法をりては  
川狩や心と術を月にして疾る  
川狩や刀をたはる世の世

晒井

さらさら井の音を聞きし  
晒井や雇うらなま  
さらさら井の子供のまを裏に

文 禮

羽後

油月 晒 芳秀 士 津 潮 翠  
ト 狩 風 律 谷 行 園 圃 山

晒井やあつらふ傳まむ水の味  
さらさら井を觸て思ふや  
晒井や汲む水の何れも  
さらさら井は清傳解く柳うね

心

心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時  
心を切れて水垂る時

拈 左 梧 美 黙 湛 松 芳 文 寸 巾  
華 栖 山 史 園 韻 律 禮 芳 仙

冷く来りし味のゆく心  
連を待らぬ舟の影やうらを  
白糸の流つさし川に心  
水より又深き味ありんか  
松の葉お梅の音原も心太  
器も傳水も冷し心  
是より心味ありれど心  
小流く実せらるる心

納涼

火の音清絶し船名の納涼  
納涼舟江は清く月と並ひたり  
夕不二の系向子揺らぎる暑

以池  
芳其古秀寸箒  
律尤松谷芳甫  
唯風好風  
雨

舟傳拂ふ舞れ松葉や納涼臺  
灯の影も花も四條川を  
納涼舟を揺らす舟の影の門  
月の心も川の影もみよ  
舟も揺らす舟も揺らす舟  
舟入る船も軽し夕暮るみ  
藤の葉も花も月も涼しく  
笑ひながら人の影も納涼臺  
香の芳も清く水も清く心  
灯も清く心も清く心  
縁先の納涼舟も舟と月  
隣のと隣合せり納涼臺

東京

聽柳泉  
風柳泉  
二風柳泉  
晚翠  
似月山  
吳雪  
逸水  
物我  
葦翁  
品海人

舟の勤多しをよみて候 夕泊涼  
也 ぬけの物涼客あり 料理理  
湯上りの新持ひりり 夫々こき臺  
月おぼろきまのくく 物涼客

昼孫

暹島より出候ものなる午膳は  
牛と降る雨ゆりあうら 昼孫は  
飼大老昼孫のま 牛の栗  
ゆりあうらもま 舟の昼孫は  
あゆりあうら 舟の昼孫は  
病余力くえん 昼孫のま 斬

羽後

菅 真 寺 芳 唯 蘭 湛 五 時 牛  
谷 車 川 律 風 雨 梧 山 生 明 以

船長の昼孫は 舟の勤多しをよみて候  
旅人共連結り 舟の勤多しをよみて候  
普信信の昼孫は 舟の勤多しをよみて候  
一すまをよみて候 舟の勤多しをよみて候  
舟の勤多しをよみて候 舟の勤多しをよみて候  
舟の勤多しをよみて候 舟の勤多しをよみて候  
舟の勤多しをよみて候 舟の勤多しをよみて候  
舟の勤多しをよみて候 舟の勤多しをよみて候  
舟の勤多しをよみて候 舟の勤多しをよみて候  
舟の勤多しをよみて候 舟の勤多しをよみて候

葛 美 柳 山 祥 松 未 曉 勇 山 激 園 兵 羊 寸 芳 法 詩 芳 律 風 律

汗

藤

川名もゆき冷くもる好肌の汗  
引く汗もらひ花を〜好肌を  
汗梅〜〜ゆきを好も綱汗  
心かれゆく神馬も汗も人の中  
汗の香も家も候〜き旅路  
と和汗もゆく好益物の心徳利  
春もも海も海も汗も拭ひゆく  
珠粒も重くも〜〜汗も拭ひ  
峠廻りも岬も汗も流れゆく  
旅人も汗もあま〜〜都入  
橋も汗もあま〜〜都入  
流り〜〜汗も拭ひゆく

高橋

其 善 種 雲 漸 晚 黙 一 梧 貞 里 祥  
山 哉 以 外 圃 界 史 高 風 事 山 松

隣も傳りるも汗もあま〜〜危  
〜〜〜〜〜汗もあま〜〜細  
葉も香も傳りるも汗もあま〜

芳 文 法  
律 禮 勢

折るも手蒼の如く〜〜咀の梅  
善もゆき冷くもる好肌の汗  
竿の伸も鮎の自快〜〜  
暮の粉も傳りるも汗もあま〜

送 律 笠  
送 律 笠

漢

いたつら子思く嗚子情ふほ  
 名を捨て遊ハ之刻りの角力取  
 泪もらきハ年暮如くせ  
 結うら身ハ除却の度ハ出て  
 汁を 鮎カ増梅ハ能い  
 皆之ハ簾下す 涼々舟  
 如くハ 三渡冬候際ハれる如  
 内院を通り指レハ廊下口  
 時雨之ハ 一ハよく晴ハ月  
 轉ハ一ハ端ハ早い何ハ白  
 三右の形りハ 大人程ハ  
 新ハ一ハき多ハ陰ハ盛

律 筈 律 筈 律 筈 律 筈 律 筈 律 筈 律 筈

掃ハ候 雪ハの白ハ赤ハ  
 永きハ水ハちらす 露ハ香  
 甜差町チラ知れハくきさ  
 二人ハ色ハ 樂ハ小多ハ  
 啞ハ愚量ハ 一ハ願ハ  
 白粉ハ紅粉ハ付ハきハ  
 田植湯ハ 一ハ入込  
 葉ハ知ハ海ハ 一ハ風情ハ  
 馬車ハ 腕車ハ 神華ハ 供  
 動ハ 一ハ金ハ力ハ 汚教ハ  
 換ハ 一ハ好ハ原ハ 一ハみハ  
 陳米ハ 一ハ香ハ 一ハ月ハ 秋

律 筈 律 筈 律 筈 律 筈 律 筈 律 筈 律 筈

巻

樹子ふれてさす、天井  
 條の虫か啼きふし、脚の袋、樹  
 拵れ、下れとされ、元山  
 深舟を懐、舟拵と好、母茶碗  
 腰をかける、股引うすし  
 袴子あつちの、強兵、旅の花  
 ぬき、運ぶ、舟、湖

傳り、さす、足、色、く、桐、舟  
 神、ふ、さ、き、く、舟、舟、舟、舟

文芳  
 禮律

笠律 笠律 笠律 笠律 笠律

かり、船、浪、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 いら、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 旅、人、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 春、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ  
 苦、菜、菖、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 山、分、限、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 着、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 や、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ  
 流、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 京、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 不、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟、舟  
 さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ

禮律 禮律 禮律 禮律 禮律 禮律 禮律 禮律



新戸流——尚書治九條の流る道  
 いそぎの追ひ車はけらけ  
 ゆくりのゆるい幸觸きくは盛  
 家かたれけり家書は神  
 を降らぬかたけ雪のこひに  
 者りても焼ても解きよい物  
 減ちてまきくそちのうらら  
 弱くそとせし難刀杖杖  
 形新瑞強君の運のきこきよ  
 物に——痛きともひもまん  
 師を物り状も知くまきく書  
 通して安せ安流もあはる

律禮律禮律禮律全禮律禮律

迷い心——心の駒の総まれて  
 即菩提との中す如脳  
 村雲の晴き雲月をもの照  
 秋の屋をまきまき訓法  
 上りから下り築も傳き通  
 酒を飲めまきけり徳  
 業修り小親をまきも大るかり  
 世に流る——死流去は流  
 有上り植てり——の長長者  
 里のま物りも細うらぬ春

律禮律禮律禮律禮律

Handwritten text in a cursive script, possibly a form or document, enclosed in a rectangular border. The text is oriented vertically on the page.

Printed text at the bottom of the page, likely a title or footer, oriented vertically.

